

博士論文（要約）

論文題目

童謡のメディア論

—1920年代における「声の文化」の再編—

氏 名 周東 美材

本論文は、1920年代における童謡を事例として、複製技術に媒介された「声の文化 orality」の再編について考察したものである。本論文が明らかにするのは、近代日本における音声メディア技術の社会的な構築過程のなかで、子どもという文化装置が構造的に組みこまれていったことについてである。

1920年代は、近代的な生活スタイルが成立する時期であり、社会変動の時期であった。第一次世界大戦以降、日本社会のみならず世界の各地で、都市化と農村の荒廃、マス・コミュニケーションの発達と本格的な消費社会の台頭、女性と子どもの家庭化、植民地の帝國的秩序への編入といった事態が進行した。

そのような1920年代前後の状況のなかで、雑誌、映画、レコード、ラジオといったメディアが国民国家を基礎単位としながら形成され、大衆文化が成立していった。音楽文化にかんしても、アメリカのブルースやジャズ、キューバのソンやマンボ、アルゼンチンのタンゴ、インドネシアのクロンチョンといったように、国民的な音楽のジャンルやスタイルがグローバルな規模で各地において創始され、流行していった時期だった。世界の動向と対応するかたちで、1920年代前後の日本においては、童謡こそが国民的な音楽として創作されていったといえる。童謡は、この時期に創作された歌謡としては、ほぼ唯一その後も歌いつがれた歌謡であり、21世紀においてもなお、童謡には政府やメディア産業によって「日本的な」歌謡としての性格が与えられている。

童謡が国民的歌謡としての性格をもつに至った事実は、大衆的なメディア技術の構築過程において、「子ども」という文化や価値意識を、近代日本社会が選択的に取りいれていったということを暗示している。近代化の変動プロセスを媒介する文化装置として、「子ども」が音響メディアによる「声の文化」の再編過程のなかで作動していると仮定することができる。

この仮説を検証するために、本論文では W.オングの「声の文化と文字の文化」というメディアと社会の構造変動のモデル(聴覚性と視覚性、および一回性と複製性という2つの二極性)に注目し、これに基づいて本論の各章を構成した。各章では、童謡の変容と「声の文化」の再編過程について考察し、以下のような事柄を明らかにした。

本論前半の第1章から第3章は、文字メディアにおける童謡とその身体化のプロセスについて考察した。まず、第1章では、童謡が、童心をつうじて、恍惚のなかで自他の境界を溶解させ、古代や夢想の世界を直接的に媒介することを目的として創作されていたことに注目した。北原白秋は、作謡しながら恍惚と夢想にひたり、自我と自然の境界を溶解させていた。童謡を作り歌う身体は、童心で充たされ、古代や読者の子どもと透明に交流する神秘的で霊媒的な身体へと変容すると考えられていたのである。だが、北原の神秘的な童心主義的創作技法は、楽譜という媒体性と対立していった。『赤い鳥』の内部では、北原の方向性を目指すのか、楽譜化や音楽化を進めるのかの選択が求められることになった。

第2章では、『赤い鳥』童謡の受容の局面を、学園ユートピアの建設を目指す成城小学校

を事例として考察した。成城小学校では、北原の創作技法を引きつこうとする国語教師らと、身体教育を無視することはできない音楽教師らとのあいだで、童謡観のずれが生じた。両者の断裂が深まるなかで、一部の教師や親は幼児期を本当の自然状態であると見なし、幼児が口走る韻律ある声を童謡として捉えるようになっていった。幼児の童謡は、文字によって書きとめられながらも、その文字の媒体性が消しさられ、透明に子どもの声の世界を現前させていると考えられた。幼児の童謡は、新教育運動にとって、いわばひとつの「聖典」となっていった。声と文字を二分し、より純粋な声とはなにかを突きつめていくなかで、幼児性こそが、もっとも根源的で純粋な声であると信じられるようになったのである。

これにたいして、第 3 章では、音楽の側面から、北原や成城小学校の国語教師のように身体を透明なものに見なすのではなく、身体を表現の媒体として捉える立場について考察した。ひとつの事例として、鈴木 of 音楽事業の展開を考察し、新宿園や鶴見花月園における児童歌劇学校の構想について明らかにした。新宿園や鶴見花月園は郊外開発のユートピアとして建設されたものであり、童謡は消費社会的な遊芸空間において上演されようとしていた。また、もうひとつの例として、『赤い鳥』に楽曲を寄せた作曲家の認識を検討した。鈴木 of 理念に寄りそって、学校唱歌調の楽曲を書いた成田爲三と、北原と協働し、芸術歌曲を志向した山田耕筰とのあいだでかなりの作風の違いがあることを指摘した。とりわけ、アクセントは、北原の童謡論に即して作曲するための方法であったことに注目した。これらふたつの側面から、本章は、歌や身体表現をめぐる認識が、童謡の創作運動の担い手たちのあいだで分裂していたことを明らかにした。

本論の後半である第 4 章以降は、童謡の上演と機械化のプロセスについて考察した。まず第 4 章では、国学、洋楽、皇室、近世、消費社会といった意味を一手に担う特異な身体として、本居長世とその娘たちについて考察した。この娘たちは、皇室の承認をうけて高貴な童謡を歌いあげ、東京音楽学校で助教授を務める父によって歌の訓練をうけながら文字としての童謡に声を付与し、各地を飛びまわり童心を上演した。娘たちの身体は、可憐さ、可愛さ、親しみやすさという側面と、大物、天才という側面の両面性をもつ、特異で超越的な生身の身体であった。本居親子は、起爆力のある「メディウムとしての人間」として、童謡の伝道者、天使(アウラ)的身体となった。これによって、童心は人間の内部に潜むものではなく、外部化され聴衆に向けて示され、表現されるものになったことが明らかになった。

第 5 章では、初期のレコードやラジオが、産業的・制度的確立へと向かうにあたって、子どもが重要な位置を担っていたことについて考察した。子どもなるものは未知なる技術を意味づける作用をもっていた。なかでも、本居親子は、新たなテクノロジーを媒介する超越的な身体だった。歌声は、親子をはじめとする童謡歌手たちによって文芸的な基盤から離陸しはじめ、新しい技術によって生産され、拡散していった。しかし、テクノロジーの確立と声の拡散の一方で、本居親子自体は表舞台から去り、親密な生活空間へと隠遁していった。彼らは超越的ではあったが、新しい音響テクノロジーへの媒介者としての役目

が終わるとともに忘却されていった。本居親子にたいして、レコード産業のなかでは、新しい子どもの身体表現と歌声が、少女に特化するかたちで量産されていった。

第 6 章では、新しいテクノロジーを導入していった家庭に空間に注目した。少女歌手たちの吹きこんだレコードは、主に家庭空間によって受容されていった。家庭空間は、伝統的・宗教的な秩序・価値意識の構造転換と、消費社会の台頭とともに生成した。家庭空間は、子どもを中心に据え、学校教育と対を成しながら相補的關係を結んでいた。そのなかで心理学という科学的権力が登場し、家庭と新しい技術の関係を調停し、未知の技術を馴致していった。その一方で、心理学は、神秘性にたいする新しい関心と呼びおこしていった。なかでも、児童文化の領域で精神分析学の知見が応用され、無意識に残存している痕跡としての童心が発見されていった。これにより、家庭の科学化が、神秘性の抑圧と回帰という両義性を孕んでいたことを明らかにした。

結章では、まず以上の考察を整理するために、各章で明らかにされた結論を、本論文冒頭に提示した聴覚性と視覚性、一回性と複製性の対立の図式のなかで再構成した。これにより、童謡が、神秘化、上演、科学化という 3 つの主要な動因によって、文字メディアと音声メディアのあいだ、複製性と一回性のあいだを、W. オングの説明した文明論的な諸段階とはちょうど逆のベクトルによって転回していったことが明らかになった。この転回過程なかで、「童心」という歴史的な概念が、(1)規範的な知識・子ども観(複製的・視覚的)、(2)霊媒的な技法(一回的・視覚的)、(3)天使的な身体(一回的・聴覚的)、(4)産業化されると同時に無意識に残存する〈痕跡〉(複製的・聴覚的)といった多義性をもつようになった。童心とは、子どもという文化装置のひとつの現われとして、「声の文化」の再編を導いていく社会的想像力であった。

つぎに、「声の文化」をめぐる技術と身体の一連の変容が、なぜ子どもという存在を必要としたのかについて理論的に考察した。とりわけ、W. ベンヤミンの議論を参照し、「幼年時代のアウラ」という概念について考察しながら、ベンヤミンの複製技術論を再検討した。これにより明らかになったのは、一般に、新たな技術は、社会化の過程で幼年時代への回帰を要請することである。すなわち、社会は、技術を未知で魅惑的な対象として認識し、これを馴染み深いもののなかで、神話的な象徴や儀式性の世界のなかで受容しようとする。そしてそのとき、社会は幼年時代への回帰によって、子どもの知覚形式をふたたび取りもどし、技術の社会的な受容を果そうとするのである。子どもとは、神話的世界と近代的な世界、過去と現在を結びつけるための特殊で契機であり、郷愁と覚醒とを同時に生み出す契機であったことを指摘した。

近代的な技術の社会的受容が一般に子どもという想像力を必要とするものの理論的背景を踏まえ、最後に、「声の文化」をめぐる近代的な技術の社会的受容にあたって、とりわけ日本社会がなぜ子どもという存在をことさら必要としたのかについて考察した。この問いにたいして、本論での事例の検証から下された結論は、「声の文化」とテクノロジーの資本

主義的な展開のなかで、とりわけ 1920 年代の日本社会が伝統的な階層や宗教的価値意識の転換期にあり、新たなエートスとして、子どもという聖なる心性を必要としたからである、というものである。いみじくも野口雨情が述べていたように、童謡とは新しく見いだされた「宗教」だった。それゆえに、童謡は自らを「声の文化」の再編をめぐる諸変容の中心点となり、一流の芸術家、先端的な教育機関、都市型の消費や娯楽の生活空間、皇室、大資本、聖職者や神秘主義者、そして最新のテクノロジーが集結する場を作り上げていったのである。

本論文は、以上の考察をつうじて、近代日本社会における「声の文化」のなかに、構造的に子どもという文化装置が組みこまれていったことを明らかにした。本論文が解明した事柄は、戦後のテレビ時代のアイドル、インターネット時代のボーカロイドなど、日本社会における複製技術に媒介された「声の文化」の特徴のみならず、広く日本型のポピュラー文化の特徴について考えるうえでも示唆を与えるものといえよう。